
最凶 = 応援団！？

新島桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最凶Ⅱ応援団！？

【Nコード】

N0288I

【作者名】

新島桜

【あらすじ】

古代から伝わる魔法を世界中の人々が使える現代社会。日本国の魔術合法都市、東邦都【とうほうと】の北蔵【きたくら】高等学校に通う主人公山本信次とその周りで馬鹿騒ぎを起こす『応援団』の人間達とのドタバタコメディ。シリアスあり、グダグダあり、トラブルあり…【信】「だあああ！！？ツツコミが追い付かない！！！！？」そんな主人公山本信次の物語。頑張れ信次、めげるな信次、君の明日はどっちだ！？

【プロローグ】（前書き）

初めまして、作者の新島桜です。 初めて小説を書いたので面白く無いかも知れませんが、皆様の暇潰しになれば幸いです。感想等ありましたら書いて貰えると嬉しいです。 書き初めですがこれからも努力していきますm（＿）m

【プロローグ】

〽東邦都武蔵市近郊〽

【始岳寮内】

「くあああゝゝゝ…」

気持ちいい朝の光が窓から差し込むと共に1人の男が起きて来た。

彼の名前は山本^{やまもと}信次^{しんじ}、16才

東邦都立 北蔵高校に通う二年生だ。

今日は一学期の始業式、気分一新学校に行こうと二段ベッドから起きようとするが…

ドスンッ！！

「グペッ!?!」

二段ベッドの上から落ちてきた『物』もとい『者』に押し潰されて
気絶した…

「イテテテ…」

二段ベッドの上から落ちてきた人物は腰を擦りつつ立ち上がった。

「二段ベッドの上から落ちると結構痛いな……後で信次と交換するか」

二段ベッドから落ちた人物こそ山本信次が通う北蔵高校三年生にして部活の先輩である、中里俊樹 なかさと としき 17才

ちなみに、ここ始岳寮は北蔵高校の学生寮である。

「ん〜、いい朝だ。今日はいい事ありそうだな。さて、着替え
て食堂に行くか！」

俊樹は制服に着替え、食堂に向かっていった……

信次が復活したのは、それから30分後の遅刻ギリギリであった。

【北蔵高校2-1C教室内】

「…………と、こんな事があつたんだよ」

山本信次は教室内で会った親友に今朝の出来事（事故）を話していた。

「あはははは、それで寮から遅刻ギリギリだったのか。信次らしいと言えば、信次らしいな」

今、信次と話している人物は、はらまさき原雅樹 16才 信次の親友（自称）である。

「…………何か今、凄く失礼な事を言われた気がするんだが」

「気のせいだよ。」

ううむ、とうねる雅樹と今朝の出来事があつて若干不機嫌な信次。
（朝飯、食べ損ねたな…）

と、信次が考えていると携帯にメールが来た。

【チャッチャラチャッチャ チャッチャラチャッチャ チャッ
ラ キコキコキコ〜ン ただの携帯〜】

……ドラ。もんの秘密道具登場の効果音で

「だはははは！？お、お前携帯の着信がそれって、だはははははははははは！……」

（……………中さん（中里のあだ名）人の携帯勝手にイジったな……）

少し鬱になりながらもメールを読んでみる信次…

…

……

……

……………

そして、携帯を閉じる。

「なんて書いてあったんだ？」

そう聞いてくる雅樹に信次は…

「何か今年入ってくる一年に三人俺たちの『部活』に入るのが決まったらしいよ…」

「へ〜、お前の『部活』に入る奴らが、しかも三人なんて豊作じゃね〜か」

そう言った雅樹に対して信次は苦笑いしながら席に着いた。
そして、メールの内容をもう一度確認してみた。

（お前の知ってる三人か……アイツラが入るのは分かってたけど、
また『部活』が賑やかになるな〜）

そうぼんやりと思いながら窓の外を見ていた。

【??? × 3】

「…あれ？」

「どうした？いつも通り馬鹿みたいな声を上げて？」

「……………まさかとは思うがこんな所で道に迷ったとか」

「まつさか、さすがにそれはな

「すまん」……………はっ？」

「……………迷った」

「「あほか――――！！！！！！」」

そんな日の朝の出来事……………

ちなみに、遅刻まで後5分前の会話なのだった♪

【第1話】始業式と騒動（前書き）

何かバカが出てきます

【第1話】始業式と騒動

【北蔵高校体育館 山本視点】

ここは体育館、始業式の真っ最中だ。ちなみに今は校長のありがとう（つまらない）話の最中だ。皆聞いてないし先生達もぼんやり聞いていたり、舟をこいでいたり、携帯イジッていたり……ん、携帯？

（って駄目だろ！携帯は！？）

と、思っていたのも束の間、教頭に携帯を没収されていた……あつ、軽く泣いてる……
まつ、そんなの見ててもつまらないし中さんの方でも見てみるか……

【中里視点】

（ふああああ、校長の話聞いてると眠くなるのは何でだろうな？）

おつ、信次から視点変更して俺の所に来たのか？ハッハッハッ、こつち来ても面白いことなんてないぞ？

つつーかお前誰？ビデオカメラなんか持ってこつち来て？まあ、別にいいか。

所でさ、そのカメラに校長の話録音されてる？あつ、されてるのな

…その後でダビングして俺の所に持って来てくんねーか？爆睡するのを使うから…よし、後で晩飯のオカズ（信次の）をくれてやろう。じゃあ、出来たら持って来てな。

【信次視点】

（んっ？何か俺の知らない所で人権無視された会話をされているよ
うな……）

【気のせいですよ、気のせい】

（うお！？、お前誰だ！？）

【え〜と、カメラの精です。これから君たちの周りの状況を視聴者に映す為に作られました。】

（ふ〜ん、只のストーク）

【カメラの精です！】

（いや、でもそれはス…）

【カメラの精です！！】

（けどね、それは立派な…）

【カメラの精なんですよー（泣）】

泣いてしまった…めんどくさいな、こいつ……

（じゃあ、それでいいよ…）

【本当ですか！？】

泣き止んだ…ホントめんどくさいな

『ヤベー！始業式始まつてる！！』

トタトタトタッ

『山田が道に迷うからだろ！』

ドタドタドタッ！

（んっ？この声は…）

『全部ワシのせいじゃないだろ…』

ドドドドドッ！――！

（アイツラか……っつか道に迷うて……）

足音と話し声が近づくに連れて体育館がざわめきたつ……そして、

【ゴンガングシャッ！――！】

体育館の扉は開かなかった……っつか凹んだ！？どんだけスピード出してたんだよ、アイツラ……

『イタタタッ、何で扉開けないんだ、山田！』

『ワシのせいじゃないぞ、風穴。ワシはちゃんと押したわい、なあ鹿島……』

『んな事後でいいからとりあえず上から退けお前ら……っつか、風穴お前また太っ　ハッ！――！』ガハッ！――！』

扉の向こうで風穴の気合いの声と共に、人体から出ないであろう音が体育館に響いた……ちなみに扉の下から赤い液体が滲んで来たのは見なかった事にする。

『まったくこいつは、何言い出すか分かったもんじゃないな。』

『ハッ、ハハッ………』

山田、声震えてるぞ……♪

『な、なあ風穴、とりあえず中に入ろうとおもったが……』

『それもそうだな』

風穴はそう言ってなにやら扉の向こうでガサガサと何かをしている。俺達は当然三人が出てくるであろう扉に注目した……視界の隅に映ったステージでは、校長が背中を向けていじけて居たが無視した。

『セリヤッ!』

【ガゴーーーーン!!!!!!】

凹んだ扉がステージ横の壁まで吹き飛んだ……もはや扉の原形留めてないけど……

「すいません、遅刻しました」

「遅刻しました」

そして、体育館の入り口から入ってきた二人に全員……二人？

「おいっ、風穴に山田……鹿島はどこだ？」

そう、扉の向こうから聞こえていた声は三人…しかし入り口に立って居るのは二人で後ろにも誰一人いない。

「あつ、山本さん久しぶりですねー！」

「おゝ、本当じゃ。信次さん久しぶりですのゝ」

二人はそんな事無かったと言わんばかりにこちらに手をふる……ついでに体育館内の全校生徒の視線（好奇心全開の）も集まる…

「人の話を聞け、お前らは……で、鹿島は？」

もはや投げ遣り気味に聞くと二人は吹き飛んだ扉を指差した…そこに目を向けてみる…

吹き飛んだ扉の近くに転がっていた……体が小刻みに震えてるから大丈夫だな、うん♪

「まあ、そんな事良いとして風穴に山田、鹿島を治療室に運んでやれ」

中さんが風穴達に指示を出した……ってか中さん？鹿島の状態をこんな事で片付けていいの？

「いいんだよ、鹿島だから」

うわゝ、鬼畜ですねゝ……………んっ？

「中さん、俺考え口に出しました？」

「いや、俺が勝手に信次の心を読んだゝ」

「勝手に読まないで下さい！」

「まあまあ、別にいいだろゝそれよりも信次は風穴達を治療室まで案内してやれ。俺は扉直しておくから」

「うえゝい、わかりましたゝ」

めんどくさいけど、中さんに逆らうと命が無いからここは大人しく従おう。

こうして俺はバカ三人を連れて治療室まで案内した…

治療室まで三人を案内した後、俺は体育館まで戻る事にした…

体育館に戻った時には始業式は既に終わった後であった。

ちなみに壊れる前の無機質な扉は悪趣味な装飾が施された扉に変わっていた…

ってか、終わったなら誰か教えてくれてもいいじゃん……

ぐすんっ（泣）

【第1話】 始業式と騒動（後書き）

次の話にヒロイン（？）が登場予定

始まりの部活、活動しないけど…（前書き）

間違っ て新しい小説で出してしまいました が気にしないで下さい。

始まりの部活、活動しないけど…

【放課後・特別訓練用第一グラウンド】

始業式が終わり、各教室でLHRが終わった後、一学期の1日目と言ったこともあり学校は午前中には終わった。そして、昼食を食べ終わりここ、特別訓練用第一グラウンドに中里、山本、風穴、鹿島、山田の5人が集まっていた。

「よし、全員集合したな？」

「中さん、まだあいつが来てませんよ？どうするんですか？」

「んっ？俺はちゃんと連絡したぞ？だから、遅れる方が悪い！それに信次はあいつがいない方がいいだろ？」

そう言つて、中里は信次の方を見ながらニヤニヤと笑っていた。

「まあ、否定しませんけどね…あいつが居ると自分が一番被害被りますし。あの凶暴かつ攻撃的な性格何とかありませんかね？」

「だゝれが凶暴かつ攻撃的だつてゝ？信次ゝ？」

真後ろから突然声を掛けられて信次はゆっくりと首を後ろに向けた。

そこには、肩まである黒髪をポニーテールで纏めた美少女が仁王立ちしていた。

「ま、真奈美…？何時からそこに…」

信次は震える声で少女に問いかけた。

「まあ、否定しませんけどね、の辺りからだけど？まあ、それはそうと信次…？」

そう言つて少女は信次に一歩近付いた。もちろん信次は後ろに後退りする。少女の顔は笑つてこそいるが、こめかみには血管が浮いている。ついでに、背中にゴゴゴゴみたいな効果音が見える気がする。

対象的に信次は滝の様に冷や汗を掻いている。それはもう、全身の水分が無くなる感じの勢いで…

「いやっ、ちょっ、待つて！落ち着い…」

「問答無用！『炎よ、我が拳に宿りて彼の者を灰塵にせよ』必殺！
！『炎塵拳』！！！！」

【ゴシャアアアン！！！！】

「ほなああああ！！！」

真奈美の手が炎に包まれたと思った瞬間、信次の懐に入りアップパーカットよろしく信次は星になった…

【最凶〃応援団！？完】

「って待て待て待て待て！！！」

星になったはずの信次がいつの間にか戻って来ておりカメラの精にツッコミを入れる。

「何勝手に終わらせてるんだデメー！！！」

【いやあゝ、何か綺麗に終われそう感じたので…：…なんとなくノリで？】

「疑問形で聞くな！っつかノリで終わらせてたまるかー！！！」

【いやいや、信次さん？ノリを馬鹿にしてはいけませんよ？それに対して信次さんときたら…】

そんな風にコントを繰り広げている一人と一匹（？）を遠巻きに見ていた中里はめんどくさそうに頭を掻きながら

「あつちは取り敢えず放っておいて自己紹介するか。」

と、やる気の無い感じで言い放った。

「まずは風穴達からいくか。と言う訳で風穴から順番に自己紹介、どうぞ！」

いつの間にか取り出したマイク片手に風穴を指差した…ってかテンション高いな、あんた？

そして、風穴と呼ばれた男子はゆっくり立ち上がると自己紹介を始めた。

「風穴^{かざあな}達也^{たつや}15才、風、土の魔法及び気全般での特専生（特別専攻生）です。宜しく願います。」

そう言って風穴は頭を下げた。

周りからは拍手の音が聞こえ、その後風穴は頭を上げた。

「よし、じゃあ次は鹿島だー！」

そして叫ぶ中里…っつかマイクの意味あるのか？

「鹿島^{かしま}孝太^{こうた}15才です。水と雷の魔法及び防御・補助系の気全般の特専生です。宜しく願います。」

そして、風穴と同じように頭を下げた。

拍手の後に頭を上げる鹿島、そして…「最後に山田、自己紹介逝つとけ!？」

右手に持ったスピーカーで中里は大声で叫んだ……だから、どっから出したんだよ!んな小道具!!

「中さん!？わしはまだ逝きませんよ!？えゝ、山田^{やまだかつみ}勝己、歳は15じゃ。火と木の魔法及び攻撃特化系の気全般の特専生じゃ。宜しく。」

頭を下げる山田。

「そう言えば三人はどのクラスなの?」

山田が頭を上げると同時に真奈美が三人に疑問をぶつけた。真奈美の問いかけに鹿島が手を挙げながら答えた。

「俺達三人は1 - Bです。」

と答えた。

「よし、一年の自己紹介終わったし俺達の自己紹介するか!まずは

この俺、団長こと中里俊樹、17だ。魔法と気は全般使える…っつか使えないのは片手で数えるしか無いからそこんとこ宜しく」

と軽く答える中里、自己紹介が終わって暇になったらしく、未だに言い争いをしている信次の方に突撃していった…

「……じ、じゃあ今度は私ね。私は轟真奈美、とどろきまなみ歳は16よ。魔法は火と水、気は回復全般が得意。彼氏無しだけど仲良くしてね」

真奈美はそう言つと信次達に自己紹介終わったよ、と叫んだ。すると間髪入れずに信次が中里に投げ飛ばされてきた。

「あああああああああ!!!!」

【ズゴシャーーーー!!!!】

哀れ信次、顔面からダイレクトに着地をし、勢い良く立ち上がると中里の方を向いて大声で叫んだ。

「中さん！いきなり腕掴んで力任せに投げるの止めて下さい!!」

「まあ良いじゃん、そこまで行つたついでに自己紹介済ませとけ」

右腕を庇って痛みを和らげようとする山本とは対照的に中里は腰に手を当てて高らかに笑っていた。

「…なんか扱いひどいな、俺は山本信次16才。2-C在席で魔法は火、木、水、土が得意だ。ちなみに気は使えないけどね。その代わり魔法トラップは全国一の評価を持つてるから、これから宜しく」

そう言つて山本は手を振った。全員の自己紹介が終わった所で再び中里が風穴達の前に立った。「さて、自己紹介終わった所でお前ら三人にはちよつとした訓練を受けてもらう。まあ、実力を測る事を目的としてるから気楽に行ってくれ。訓練は明日行うから詳しい事は後で伝える。」

そう言つて中里は校舎の方に去って行った。

「あつ、そうそう」

何かを思い出した様に山本は一年三人組に顔を向けて言った。

「中さんは気楽になんて言ってたけど、気を抜くと下手すれば死ぬ可能性あるからな。中さんが出す訓練内容は下手な軍隊より厳しい事で有名だから」

不吉な事もと自分達も死にかけた様な事を言っ山本も何処かへ行ってしまった。

残された三人は互いに顔を合わせて明日行われる訓練に不安を抱いているのだった…

始まりの部活、活動しないけど…（後書き）

次は一年トリオに不幸が降りかかる予定

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0288i/>

最凶 = 応援団！？

2010年10月9日23時27分発行